

異常内分泌環境下卵による心身障害発生の疫学的研究

高年産婦出産に関する臨床統計

横須賀共済病院 産婦人科

永井生司

35才以上の高年産婦230例と35才未満の対照産婦203例について、また、21例の高年産婦について、前者はretrospectiveに、後者はprospectiveに、妊娠、分娩、産褥期の母児について調査した。高年産婦は43才が最高年齢で、平均37.2±2.1才(mean±S.D.)であり、高年産婦の頻度は調査期間の全分娩数4,119例の5.58%であった。対照例は18才より34才に分布し、分娩時平均年齢は26.5±6.7才であった。高年産婦の結婚年齢は、分娩時年齢の高令化に平行して高令化しており、平均結婚年齢も28.7±5.7才で、対照例の23.9±2.6才より有意(0.02<p<0.05)に高令化していた。高年産婦のうち、27才以後に結婚したものは62.3%で、対照例の13.0%より有意(p<0.001)に高かった。高年産婦の経妊、経産回数は増加すると共に、結婚年齢は低下し、他方分娩時年齢は経妊、経産回数と関連を持たなかった。高年産婦の成因は、結婚年齢の高令化と、多妊、多産である。なお、高年初妊婦は高年産婦の12.3%、全産婦の0.66%、高年初産婦は同じく、25.2%及び1.41%であった。妊娠29週以後の分娩例について、高年産婦の分娩時平均妊娠週数を年齢的に分けてみたところ、両者間には関連性は認められなかったが、対照例の平均40.2±2.1週に比べ、38.6～39.8週にあり、高年産婦の分娩時妊娠週数の分布は、28週以前が3.9%、29～38週が24.8%で、対照例の0.5%及び11.8%より有意(p<0.001)に高い頻度で、早産が高年産婦に多発することが分かる。

高年産婦の分娩様式では帝王切開頻度が高く、対照例の3.9%に対して、高年産婦では初産婦で30.0%(p<0.001)、経産婦で8.7%(0.05<p<0.1)であり、高年産婦全体では14.2%であった。帝王切開の適応には、対照例

にみられない、重症中毒症、糖尿病、子宮筋腫、卵巣嚢腫がみられ、これらが適応の25%を占め、選択的帝王切開も9.4%にみられた。児の出生1分間後のApgar Scoreの分布では、生児は対照例と差は認められないが、高年産婦では妊娠33週以後の胎児死亡、多産例が多く、3.4%(p=0.00808)、妊娠19週以後では6.9%(p=0.00004)であり、対照例では児死亡例を認めなかった。

妊娠39週以後に娩出した児の生下時体重は、高年産婦で5.8%が2,500g未満にすぎず、高年産婦に低体重児の発生が高率(0.02<p<0.05)であった。児異常のうち、外表奇形は高年産婦で0.9%、対照例の1.5%と大差はないが、ダウン症候群、新生児メレナ、新生児けいれんは1例宛(0.4%)高年産婦にみられ、これらにSFD、早産未熟児、胎児死亡を加えた児異常は高年産婦で16.7%、対照例で9.8%、高年産婦に児異常率の高い(0.02<p<0.05)ことが分かった。

分娩時母体合併症のうち、重症妊娠中毒症は高年産婦で4.8%で、対照例の0.5%より明かに高率(p=0.00523)であり、糖尿病、遂落産、母体予後不良(死亡、脳障害)、母体疲労はそれぞれ2例宛(0.8%)、性器腫瘍が3例(1.3%)あり、これらの合併症は対照例にはみられなかった。他方、Rhマイナスは対照例にのみ3例(1.5%)存在した。これらの合併症に胎盤付着異常、陣痛微弱を加えた母体合併症は、高年産婦で13.2%、対照例5.9%で、高年産婦は明かに高率(0.001<p<0.01)であった。

分娩第Ⅱ期、第Ⅲ期の出血量が500gを越えるものの頻度は、高年産婦のうち初産婦7.0%、経産婦8.5%、全高年産婦の8.2%であり、対照例の4.0%の2倍に及び、多発傾向(0.05<p<0.1)が明かであった。

児の性比は高年産婦で男 48.9%，対照例で 46.3%，児の生後 1 週間までの発育状態には、高年産婦と対照例で差はなかった。

prospective 調査では、高年産婦の年収入は平均 334 万円、小供がぜひ欲しいというものが 57.1% であり、このもの 12 例中 2 例は胎児死

(23, 33 週)に終わった。21 例中 14 例は生児分娩、1 例は胎状奇胎で、中絶手術 2 例、自然流産 2 例、胎児死亡 2 例、奇胎 1 例、生児分娩率 66.7% であった。染色体分析は 6 例の生児について行い、正常であった。

第 1 表 高年産婦の結婚年齢、妊娠週数、分娩様式、児アプガースコア

項目	年齢区分	年齢								
		35才	36才	37才	38才	39才	40才	41才	42才	43才
例数	(例数)	62	48	35	29	18	17	15	5	1
結婚年齢	(才)	27.1 ±7.2	27.7 ±4.4	28.9 ±5.1	31.0 ±5.1	28.7 ±6.1		31.7 ±6.0		
分娩時平均妊娠週数	(週)	39.6 ±2.5	39.5 ±2.6	39.8 ±2.3	39.6 ±2.1	39.8 ±1.1	38.6 ±4.6	39.4 ±2.2	39.6 ±0.5	40
分娩様式	自然分娩例	76.8		70.3		71.9				
	吸引・鉗子	4.5		4.7		5.3				
	骨盤位	6.3		14.1		1.8				
	帝切	12.5		10.9		21.1				
アプガースコア	10～8例	84.3		83.6		83.8				
	7～6	8.3		7.9		7.4				
	5～1	2.8		0.0		1.9				
	0	4.6		9.5		6.9				

mean ± S. D.

第 2 表 高年産婦と対照例の児生下時体重分布 (妊娠 39 週以後例)

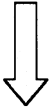
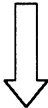
年齢	体重区分	体重				
		～2,500	2,501～2,800	2,801～3,400	3,401～4,000	4,000～
35～36才 (85)		3.5 % (3)	11.8 (10)	48.2 (41)	31.8 (27)	4.7 (4)
37～38 (46)		6.5 % (3)	10.9 (5)	52.2 (24)	30.4 (14)	0.0 (0)
49～43 (41)		9.8 % (4)	2.4 (1)	46.3 (19)	36.6 (15)	4.9 (2)
計 (172)		5.8 % (10)	9.3 (16)	48.8 (84)	32.6 (56)	3.5 (6)
対照例 (178)		1.7 % (3)	16.9 (30)	49.4 (88)	27.5 (49)	4.5 (8)

(例数)

第3表 高年産婦と対照例における児異常

	SFD	早産 未熟児	ダウン 症候群	奇形	胎児死亡 死産	新生児 疾患	計
35~36才	1.8%	7.1	0.9		4.5	新生児 けいれん 0.9(1) メレナ 0.9(1)	15.2
(112)	(2) [*]	(8)	(1)		(5) [*]		(17)
37~38才	3.1%	1.6		3.1	9.4		17.2
(64)	(2)	(1)		(2) ^{**}	(6)		(11)
39~43	3.5%	8.8			7.0		19.3
(57)	(2)	(5)			(4)		(11)
計	2.6%	6.0	0.4	0.9	6.4	0.9	16.7
(233)	(6)	(14)	(1)	(2)	(15)	(2)	(39)
対照例	1.5%	5.4		1.5		1.5	9.8
(205)	(3)	(11)		(3) ^{***}		(3) ^{****}	(20)

* 1例重複 ** 多指症及び脳ヘルニア *** 合指症, 口唇口蓋裂, 小指症
**** 高ビ血症2例, 膝関節外反症

 **検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用 
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

35 才以上の高年産婦 230 例と 35 才未満の対照産婦 203 例について、また、21 例の高年産婦について、前者は retrospective に、後者は prospective に、妊娠、分娩、産褥期の母児について調査した。高年産婦は 43 才が最高年令で、平均 37.2 ± 2.1 才(mean ± S.D.)であり、高年産婦の頻度は調査期間の全分娩数 4,119 例の 5.58%であった。対照例は 18 才より 34 才に分布し、分娩時平均年令は 26.5 ± 6.7 才であった。高年産婦の結婚年令は、分娩時年令の高令化に平行して高令化しており、平均結婚年令も 28.7 ± 5.7 才で、対照例の 23.9 ± 2.6 才より有意 ($0.02 < p < 0.05$)に高令化していた。